

本をめぐっていくと、白い光に包まれた。

その光は、ページが進むにつれどんどん強くなっていく。それとは対照的に、人々のどよめきはどんどん遠ざかっていった。

「花！」

玄徳さんの声だ。その声も、もう遠かった。

ページの最後をめぐったときには、目の前は真っ白だった。でも不思議とまぶしくはない。

帰るのだ、花が元いた世界に。

家族がいて、彩やかな、友達たちがいる。

毎日学校へ行つて、勉強して、友達と遊ぶ。

身近にいる人がそんなに簡単に死んだりすることがない。戦争を、人同士が殺しあっている姿を、目の前に見ることなんてほとんどない世界。

こつちの世界も、そんな風になればいいと思った。

花が去ったことが、そのきっかけになればいい。

「君に会えてよかった」

師匠の声だ。

はい、私もこの世界へ来て、師匠に、みんなに会えて良かったと思います。

「ここに残ってほしい。君の力が必要だ」

これは昨夜言われたこと。

この世界から戦を無くす。

何も分からずこの世界へ来て、博望の戦いで何も知らず
にこの本の力を使った。

その結果を目の当たりにした。

孟徳軍の人たちの焼ける臭いを知った。玄徳軍の人たちの血の臭いを知った。

そして何度も見て聞くことになる。

炎の色と、血の色。うめき声。断末魔の叫び。足元に連なる幾多の死体。

でも悲しいことだけじゃない。

玄徳軍の人たちに出会い、助けてもらった。この世界のことを教えてくれ、子どもたちはもちろん、戦場を離れば軍人だって花の世界と変わらない、ただの人間なんだと知った。

孟徳軍も仲謀軍も見えた。孟徳さんの考えも、仲謀さんの背負っているものも知った。

黄巾党の人たちが、どれほど太平の世を望んでいるのかも見てきた。

花はこの世界から戦を無くしたいと願った。この本があればできるはずだと思った。

そのときに、力を貸してくれたのは師匠だ。

花が本で知ることを、孔明は自分で考え出してきた。

亮くんだった師匠が花と別れてから勉強し、諸国を回って情勢を見てきたのだと言っていた。

あの時父親を殺され、花に向かい「敵なのか？」と訊いた亮くんは、「君は君の頭で考えればいい」と言ってくれた。

「戦いをなくしたい」と言った花に、具体策を示してくれた。

敵も味方もない、ただ人が死ぬのを見たくないという花の想いを分かってくれた。
「同士」だと言ってくれた。

亮くんは一体なにを考え、どれだけのものを背負って孔明になったのか。

そんな孔明が「君の力が必要だ」と率直に言ってくれた。「これからどう進むのか一緒に見届けるべきだ」と言ってくれたのだ。

できないと思った。この世界に残るだなんて、できない。許されないことだ。

けれど、見てみたい。
この世界が今後どうなっていくのか。みんなと、師匠と一緒に。

家族も友達も大事だけれど、今はもう、この世界の人たちだつて、花にとっては大切な人たちだ。

私は――。

白い光が去っていく。

見えてきた光景は、もう見慣れてしまった中華風の建物。驚き、恐れ、平伏する人々。

一番手前に座っている正装した玄德さん、孟徳さん、仲謀さんも、さすがに驚いた顔をしている。

壁際に立つ孔明も目を丸くしていた。
でも花と視線が合うと、くしゃりと顔が歪んだ。

そんな孔明の表情は初めて見る。どことなく亮くんを思

い出させた。

そして、孔明はゆっくりと笑顔になった。
その笑顔を見て、選択が間違っていないかったのだと、花は思った。

花が玄德から書簡を預かって孔明の執務室へ戻ると、来客がいた。

年輩の、格好から判断すればそれなりの身分の男。花の記憶にはない顔だ。

扉を開けて来客の姿に気づいた花は、慌てて退室しようとしたのだが、当の来客に止められてしまった。

「花殿にお会いしたかったです。実は私の甥が、いや親族の欲目を除いてもなかなか好青年でして」

花に口を挟ませずに、滔々と話し出した客だったが、孔明の声がそれを遮った。

「ありがたいお話ですが、花はまだ勉強中の身ですので」
それをきつかけに、客は孔明に向き直った。

「孔明殿の一番弟子とは言え、花殿は女性でしょう。女性が一番の幸せと言えば結婚！ そろそろお考えになるころでしょう。ぜひ一度私の甥に会っては頂けませんか」

孔明はゆるりと羽扇を動かし口元を覆った。
「そうですね。一度花に話してみます。一旦私の方で預か